

1-4-25. 奄美群島における戦争の記憶

兼城糸絵・中谷純江・石田智子

Memories of the War on Amami Islands

KANESHIRO Itoe^{*1}, NAKATANI Sumie^{*2}, ISHIDA Tomoko^{*1}

*1 鹿児島大学学術研究院法文教育学域法文系

Faculty of Law Economics and Humanities, Kagoshima University

*2 鹿児島大学学術研究院総合科学域総合教育学系グローバルセンター

Global Initiative Center, Kagoshima University

要旨

奄美群島では第二次世界大戦中に数多くの戦争関連施設が建設された。しかしながら、それらが戦時において人々の生活とどのように関わっていたのかという点に関しては未だに明らかになっていない。それを踏まえ、本研究では日米の大学生とともに戦跡との関わりや戦争体験について広く聞き取り調査を行っていく。コロナ禍により本調査は実施できていないが、加計呂麻島で実施した予備的調査の結果、多様な戦争体験があることが確認された。また、大学生にとってこのような調査体験はステレオタイプな戦争のイメージを乗り越える機会となっていることが確認され、一定の教育効果が期待できることが明らかになった。

奄美群島には、明治から昭和にかけて建設された数多くの戦争関連施設が「戦争遺跡」（以下、戦跡とする）となって残されている。しかしながら、このような戦跡が住民の日常生活とどのように関わっていたのかという点については明らかになっていない。

そこで、我々は2018年から法文学部の学生有志とともに特に奄美大島を中心に戦跡の測量や踏査を行うとともに、戦争体験に関する聞き取り調査を実施してきた。まず、2018年に行った龍郷町での調査では、秋名・幾里集落に残る奉安殿の測量を行ったほか、5名の方にご協力いただいて戦争体験に関する聞き取り調査を行った。聞き取り調査に協力してくださった方々は子どもの頃に戦争を体験した方が多かったが、空襲をはじめとする過酷な体験だけでなく、日常生活の様子や学校生活での楽しい思い出も伺うことができた。このことは「戦争＝暗い時代」と思っていた大学生にとっては意外に感じられたようで、日常生活と戦争が地続きにあることを改めて認識したようであった。ここから、筆者らは大学生とともに戦争体験者から聞き取り調査を行うことは、戦争体験に関するデータを収集するだけでなく、戦争について考えるきっかけとして生かせるのではないかと考えるようになった。

これらの成果を踏まえ、本研究では鹿児島大学の学生に加えて、サンノゼ州立大学（アメリカ）の大学生とともに戦跡の踏査および戦争体験に関する聞き取り調査を実施した。日米の大学生による合同調査にした理由には、かつて太平洋戦争で敵対した国の若者が多面的な観点から戦争について考える良い機会になるのではないかと考えたからである。ところが、2020年の春頃から国内外において新型コロナウイルス感染症の感染者が急増し、アメリカから日本へ渡航することができなかった。よって、奄美大島での合同調査も断念せざるを得なかった。そのため、本稿では2020年1月に実施した加計呂麻島における予備調査の成果のみ述べておく（注1）。

2020年1月に実施した調査は、鹿児島大学法文学部の有志（文化人類学・考古学ゼミのメンバーと教員）とサンノゼ州立大学の学生および教員の合計16名が参加して行われた。この調査の目的は、加計呂麻島の戦跡の踏査と戦争体験者の聞き取り調査を通じて「戦争の記憶」の継承方法を検討することにあった。サンノゼ州立大学のメンバーは「Local and Minority Culture in Japan」というテーマで研修を行うべく来日しており、その一部を加計呂麻島における日米合同調査という形式にしてもらった。

加計呂麻島にはさまざまな戦跡が点在しており、一部は見学しやすいように公園化されている（例えば、安脚場戦跡公園など）。今回の調査では、まずガイドの方に案内していただきながら旧日本海軍が建設した艦船用給水ダムや旧日本海軍大島防備隊戦総司令部跡地、さらには島尾敏雄の文学作品でよく知られている第18震洋隊基地跡などを見学した。それから、島で戦争を体験した方2名を対象に聞き取り調査を実施した。そのひとりであるF氏には聞き取り調査に参加していただいただけでなく、安脚場戦跡公園と待崎網農村公園（どちらも実際に日本軍・アメリカ軍が交戦した場所であった）を一緒に見学しながら、当時氏が見聞きした戦争にまつわるエピソードを伺うことができた。F氏が語るエピソードは、どれも戦争を実際に体験した人間ならではの重みがあり、それを聞く学生たちも一言一句聞き漏らすことがないようにと懸命にメモを取っていたのが印象的であった。

また、聞き取り調査では、諸鈍集落在住者であるT氏と前述のF氏にご協力いただきながら、加計呂麻島における戦中・戦後の様子についてお話を伺った。調査時間が短かったため十分とはいえないが、戦中・戦後の加計呂麻島の状況をおおまかに把握することができたように思う。個人的に印象的だったのは、戦時下の暮らしは常に飢えとの戦いであったことである。現在の加計呂麻島は緑に覆われ、自然豊かな島という印象を受けるが、戦時中はほとんどが開墾されハゲ山状態だったところも少なくないという。空襲が激しくなるにつれて、人々は山の中に避難小屋を作って暮らし、そこで畑を作ってなんとか飢えをしのいでいたそうだが、それでも食糧が不足し、時に部隊の人が食糧を分けてほしいと民家を訪ねてくることもあったという。加計呂麻島はある意味では「離島の中の離島」という場所でもあるため、逃げる場所も食料を得る場所も限られている。島嶼で経験された戦争が悲惨さを極めるのも、その孤立性ゆえかもしれないということを改めて考えさせられた。

本研究は新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって一時的に中断せざるを得なかったが、今後状況が改善され次第学生たちとともに調査を再開する予定である。現段階では、奄美大島の一部地域と加計呂麻島にて調査を行ったに過ぎないが、島嶼部で経験された戦争の実態が徐々に明らかになってきたように思う。島嶼部はその周縁性がゆえに、「本土」と比べるとただでさえも社会的・経済的にも不利な状態に置かれる。それが戦争という非常事態となると、人々の生活は相当に過酷なものになる。聞き取り調査で伺った「シマの戦争」はどれも過酷なものであり、逃げ場のない中で戦争と向き合うしかなかったという状況がひしひしと伝わってきた。

また、興味深いことに、奄美群島の戦争の記憶は決して一枚岩的ではなく、島や集落ごとに多様なかたちで存在することもわかってきた。今回調査を行った加計呂麻島で伺った戦中・戦後の体験も、奄美大島におけるそれとはやや異なっているように感じた。さらに、同じ加計呂麻島とはいえども、集落によって体験談に多様性がみられた。その意味でも、「奄美の戦

争」と一言でくくるようなことはせず、それぞれの地域の歴史を丹念に掘り起こしていくことの重要性を強く感じている。

さらにいえば、学生たちが戦争の現場となった場所を訪れ体験者から直接話を聞くこと自体に大きな意義があると考えている。例えば、調査後日米の学生たちから「今回の調査を通じて戦争が現実味を帯びて感じられた」というコメントが複数寄せられたことを踏まえると、今回のような調査がステレオタイプな戦争のイメージを乗り越える機会となったと考えている。

本研究は今後も継続していく予定である。引き続き、戦争を知らない世代が戦争を語り継ぐ方法を、「シマの戦争」を手がかりにして検討していきたい。



写真：震洋基地跡でガイドの説明を聞く学生たち

(注1) 本稿の加計呂麻島における調査報告に関しては、石田・兼城(2020)と一部内容が重複している。

参考文献

石田智子・兼城糸絵 (2020) 鹿児島島の戦争をめぐる「記憶」の記録と継承—考古学と文化人類学の共同研究—, In 南九州・南西諸島を舞台とした地域中核人材育成を目指す新人文社会系教育プログラムの構築(令和1年度教育研究活動(プロジェクト等)概算要求事項報告書), 鹿児島大学法文学部・鹿児島大学人文社会科学部研究科.